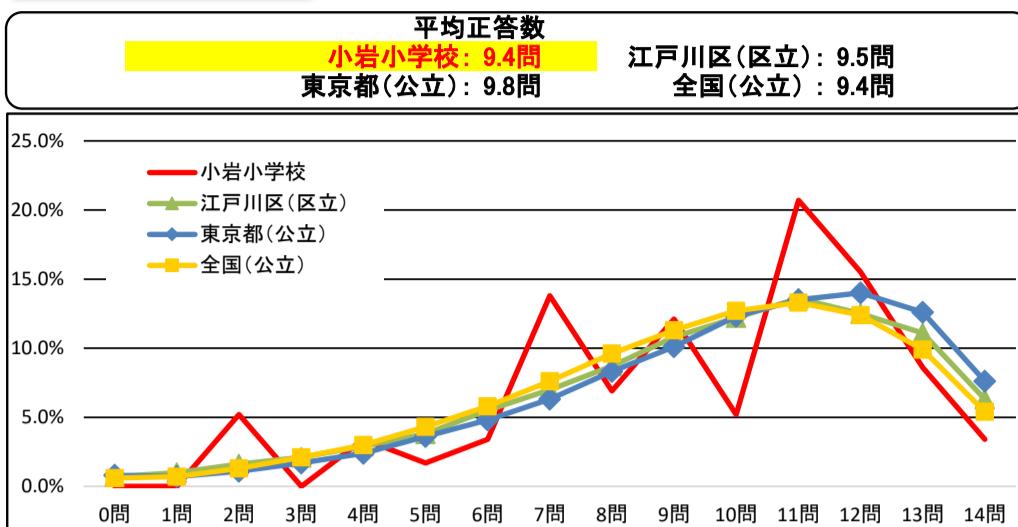
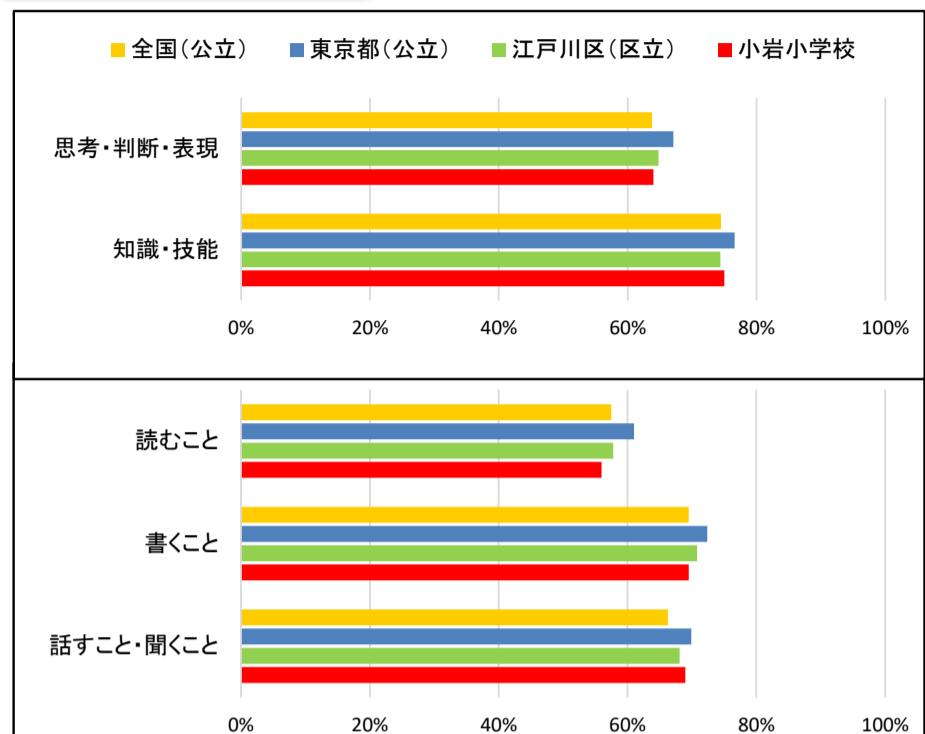


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【国語】 江戸川区立小岩小学校

正答数分布



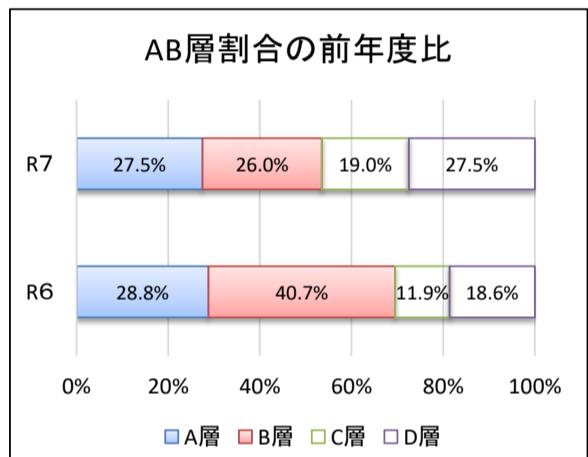
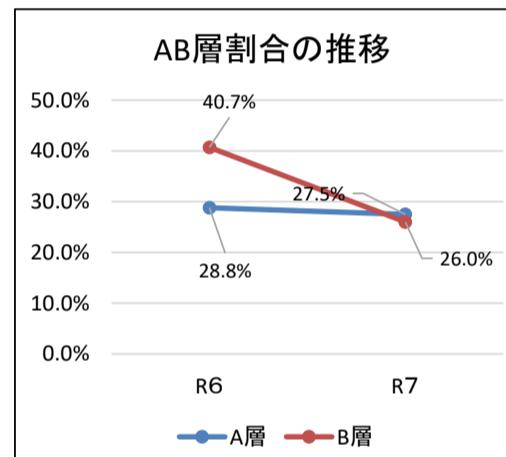
「領域別」の結果



四分位における割合 (都全体の四分位による)

国語	A層	B層	C層	D層
	12~14問	10~11問	8~9問	0~7問
小岩小学校	27.5%	26.0%	19.0%	27.5%
江戸川区(区立)	30.0%	25.8%	19.5%	24.7%
東京都(公立)	34.4%	25.8%	18.4%	21.4%
全国(公立)	27.7%	26.0%	20.9%	25.4%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について

・「平均正答率」は67%で全国をやや上回り都・区を下回った。「領域別の結果」では、「知識・技能」は全国・区を上回ったが、「思考・判断・表現」では都・区を下回った。活動別の領域では、「話すこと・聞くこと」は全国・区を上回り、「書くこと」は区・都を下回った。「読むこと」は、全国・都・区を下回り、特に課題である。「四分位」ではAB層は昨年度の69.5%から16%減少し、特にB層が減りD層が増えた。

・話し手の考え方と比較し自分の考え方をまとめる問題では、正答率が全国や都より高かったが、目的に応じ自分の考え方を伝わるように書き方を工夫する問題、事実と意見等との関係を押さえ文章全体の構成を捉えて要旨を把握する問題では正答率が低かった。自分の考え方を伝わるように書く問題や目的に応じて文章と図表等を結び付け必要な情報を見付ける問題では無回答率が高めだった。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

・主体的に思考・判断・表現する児童の育成～児童の『できそう』を大切にした指導の工夫～といいうテーマで取り組んできた校内研究を国語においても活かしていく。児童が目的意識や見通しをもち、意欲的に問題解決に取り組む手立てを工夫し、主体的に志向・判断・表現し、言葉で表現する良さを実感できるような指導を検討し、授業に活かす。
・全国学力テスト、東京ベーシックドリル、江戸川区学力調査の分析、日頃の児童の学習状況把握による対策、改善、見直しを行い授業の改善を図る。
・校内研修やOJTを通じ若手教員の育成、一人1台端末を活用した授業改善などを図る。

・基礎学力の保障

・「小岩小授業モデル」、学習のスタンダードにより、授業の基本的な学習の流れ、発言の仕方・聞き方などを全学年統一して行う。朝学習の中で「読むYOMU」の取り組みや、ドリルや電子ドリルなどを活用した学習、東京ベーシックドリルなどを習慣化し、学力の定着を図る。
・各学期に一週間電子ドリルを活用した「江戸川つ子study week！」を行い基礎学力の習熟を図る。TBDや、電子ドリルなどを活用した学習を行い、基礎学力の定着を図る。
・各学期に電子ドリルを活用する「江戸川つ子study week！」を行い習熟を図る。
・朝読書や読書科などの時間を活用し、本に親しみ言葉や文章に慣れ親しませる。

・学習習慣の確立

・家庭学習は、校内で共有し、共通理解のもとで実施する。
・家庭学習の方法は児童や保護者に伝えることで共通理解をし、内容の充実を図る。
・[学年×10+10]分間の家庭学習習慣が身に付くよう呼びかける。
・一人1台端末、電子ドリル、東京ベーシックドリルの活用。朝学習や家庭学習、授業で活用を広げる。
・各学期に1回の「江戸川つ子study week！」ではドリルパークの学習に取り組み、学年によって難易度や分量など個々に合ったコースを選択させる。

・AB層の育成

・引き続き、各学年で基礎基本を身に付ける指導を徹底し、問題解決的な学習の中で児童が既習事項をしっかりと活かすことができるようにしていく。
・事実と意見などの関係を叙述から押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握したりする活動や、目的に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考え方を伝わるように書き方を工夫していくことに繋がる学習活動を、発達段階や実態に応じて下学年から積み重ねていく。
・朝読書や読書科などの活動の中で物語文や説明文に親しみだり、必要な情報を得たりする楽しさや良さを実感できるようにする。

《チャートの特徴》

・全体的に全国とほぼ同じようなバランスで、数値も同様である。「国語への関心」は全国よりもやや上回っているが、「国語の平均正答率」は、都よりやや下回っている。「対話的な学び」「主体的な学び」はほぼ同じ数値だが、「主体的な学び」は、やや下回っていた。国語への興味関心は全国平均より高いので、児童の主体的に学んでいると意識を高め、対話的に学ぶ授業や手立てを更に工夫していく。本校児童の「自己有用感」は高く、全国よりも意識が上回っている。この意識は大切にし、「基本的生活習慣」「規範意識」などと共に今後も意識を高めていく。

《家庭・地域への働きかけ》

・「基本的生活習慣」「規範意識」は全国とほぼ同じ値である。引き続き「早寝・早起き・朝ごはん」など健康や生活に必要な内容、学習内容や子供の活動の様子などを発信して共通理解を図り、協同して子供を育てていけるようにする。「江戸川つ子study week！」や家庭学習なども連携を図り、「小岩つ子タブレットルール」は徹底を促す。連携して学習を進めることで、学びを生活と繋げて考えられるようにしていく。図書ボランティア活動とも連携し、本に親しめる環境作りをする。

